

---

# 箱の中

ari sa

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】  
箱の中

【コード】  
N5479H

【作者名】  
a r i s a

【あらすじ】  
主人公、美里は物置の整理中に異様に重い箱を見つける。その箱の中身は……………。

## プロローグ：引き金

冬に物置の整理をするのは辛いものだ。厚着していても寒い。外より寒いのはなかるうか、と思える程気温が下がる。でも、年末大掃除が迫っているから、やらねばならない。箱を積み上げて帰れば良いや。美里は作業に取り掛かった。

「こんなの捨てればいいのに・・・」

ベビー服の詰まった段ボールを抱えて呟いてみる。答える者の居ない問いに虚しくなりつつ抱えた段ボールを下ろす。その単純作業を何度か繰り返した後に、その箱を見つけた。

「あれ、重い・・・何が入ってるのかな・・・」

よく見るとその箱の蓋はガムテープで閉じられており、側面に掠れた文字で、

「千代子・・・お婆ちゃんの私物か。じゃ、片付けてから届けてあげようかな」

美里は箱を物置の外へ運び出すと、片付けを再開した。

「おばーちゃーん。物置にこんなのあったよー」

美里はさっきの段ボールを両手で抱え、祖母である千代子の部屋へ向かった。千代子は68という年齢を感じさせない程元気で若々しい。千代子の前に箱をどさっと投げ出す。

「あー重かった。で、これ何なの？特におっきい訳でも無いのにめっちゃめっちゃ重いし。」

「何だったかねえ。開けてみようか」

千代子は筆筒から錆びたボロボロの鋏を取り出した。ゆっくり、シヤキシヤキとガムテープを裂いていく。

パチン・・・

千代子のしわしわの手が箱の蓋をゆっくりと持ち上げた。美里は息を呑んでそれを見守る。その箱には、物凄い秘密が隠されているよ

うな気がした。千代子も同じような気持ちだったのかもしれない。中身を確かめるとゆっくりと息を吐き、言った。

「空っぽだよ」

「ええっ!?!」

美里も体を乗り出して箱の中を覗き込んだ。そして信じられない、といった調子で呟く。

「本当だ、無い……」

あんなに重い箱が空っぽだなんて。

美里は、箱を捨てようと持ち上げた。そして叫ぶ。

「か、軽いよ!おばーちゃん、箱が軽い!」

箱は空箱にふさわしい軽さとなっていた。

このときは、二人とも気付いていなかった。

この一連の出来事が、後に恐ろしい事件を引き起こす引き金となるなんてことには……。

## 第一話・悲鳴

納得がいけない。異常な重さを持ちながら空っぽだった箱。開けたら軽くなつた。その理由を、おばーちゃんは、「長い間開けずにいたから空気が変質したんだろう。開けたからその空気が抜けて軽くなつたんだよ。」って言つてた。でも私、赤城美里は納得いかない。だって普通空っぽの箱の蓋をガムテープで留めたりする？それに、空っぽの箱にワザワザ「千代子へ」なんて書いとくのかな？やっぱり納得いかないよ。

「いかないよ、納得いかない……」

思わず口に出して呟いていた。すると次の瞬間、頭のとっぺんを派シーンとはたかれた。

「いったーい！なにするんですかあつ」

あ、そいえば今は授業中だったの。私の可愛いおつむを思いつきり叩いたのは安西センセ。まだ20代の若い男のセンセだよ。私たちのクラスの担任で、歳があんまり変わらないから、女子からだけじゃなく男子からも人気があるんだよね。私はあんまり好きじゃないけどね。すぐ人の頭ぽかすか殴るしさ。口も悪いんだよね。

「納得いかないだと？ならば連立方程式の答えを、お前の納得のいのように説明してもらおうか。」

「えー！勘弁してよお〜」

「さあ、さつさと前へ出てやるんだ」

「ぎゃあ〜〜」

つ………疲れた……。一日中一つのこと考えるのって勉強するよりくだびれるんだね。初めて知つたわ。おまけに黒板の前で恥をかかされるっていう補足イベントまであったしね。夕食まで一眠りしようかな。家には今私とおばーちゃんとして居ないから邪魔者は居ない。ゆっくり寝られるね。ベッドの上で寝つ転がる。そん

で目を閉じる。あー、気持ちいい。この寝てるのか寝てないのか分かんないところが気持ちいいんだよね。あ、あ、寝ちゃう……おやすみ……

ぎゃあああああああああああーっ……

んっ!？何、今の。悲鳴!？誰の!？……っとおばーちゃんに決まってるじゃん!家には今私とおばーちゃんしか居ないんだから!でも、何で?何で悲鳴を上げるの!?

私は部屋を飛び出しおばーちゃんの部屋の襖を開けた。おばーちゃんは敷かれた薄っぺらい布団の上でがたがたと震えている。

「おばーちゃん!どうしたの!？」

「ああ……ああ……ああ……静が……静がいたんだよっ！」

「静??シズって誰なの!？」

知らない名前だった。

「し……静は……」

おばーちゃんはポツポツと語り始めた。

### 第三話・過去

千代子が中二の時、クラスには苛められている女子がいた。いや、それは違う。千代子が、苛めている女子が居た。千代子はクラスでも目立つタイプで、誰も千代子には逆らわなかった。逆らえなかったのかもしれないが、表面上は皆千代子に賛成しているように見えた。

上履きを隠す、体操着を泥だらけにする、体育倉庫に閉じ込める…… 思いつく限りの苛めを行った。千代子だけではない、クラスの中で、その子に対する苛め行為はよいストレス発散行為となっていた。

その子に苛められなければならないほどの落ち度があった訳ではない。ブス、と罵倒されなければならないほど顔が悪いわけでもないし、頭もそこそこのレベルだし、性格も明るくはきはきしていて良い子だった。それがなぜ、苛められなければならないようになったのか……

千代子にも、これといった理由があったわけではない。ただ、選んだのが偶然彼女だっただけだ。偶然が運んだ彼女の不幸……それが原因で、中二の冬、進級間近、彼女は命を自ら絶つことになる。遺書も残さず、ひっそりと……。千代子とクラスメートは担任からそれを聞き、一瞬どきりとしたが、遺書を残していないと知り、ホッとしたと同時にすべては千代子たちの中で他人事となり、すぐに忘れ去られてしまった。

まさか彼女が遺書を残さなかったのは、自らの手で復讐をしようとしていたからだなんて、千代子にも、他のクラスメートにも、分かるはずがなかった。

彼女の名前は河合静。そしてそんな女のことなど忘れてから何十年も経った現在、静苛めのリーダーであった千代子の夢に現れることとなる。

その夢の中、静は千代子に言った。

「引き金は、引かれた。後は私が弾丸となってお前らを薙ぎ倒すのみ。覚えている。お前たちに私と同じ、いやもつと深く苦しい痛みを味わわせてやる……。お前らの残り少ない命が終わる前に私が終わらせてやる。心している……。」

と。千代子は怯えた。同じ？それ以上？私はそんなに静を傷つけた？でも、千代子達は静を傷つけ、静は自殺した。それだけは何十年経っても消えない事実であり、静は復讐をしようとしている。いや、あれは夢だったのだろうか？千代子にはそうは思えない。

静の復讐が、始まる。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5479h/>

---

箱の中

2010年12月31日07時20分発行